

地域貢献・ボランティア・政治参加…  
動き出す高校生が増加中

# 自分たちの方法で 社会とかがわる高校生団体10

行政の地域活性化策に疑問を感じ  
まちおこしイベントを企画

2012年8月に「和歌山活性化プロジェクトWAKKA!!」を立ち上げた和歌山県立耐久高校定時制4年の小幡和輝さんは、小・中学校時代は不登校状態だった。高校は通うようになったが、2年前まで心の中にあっただのは「義務感だけ」という。

自分を変えたい——そんな思いを抱いていた高2の春、小幡さんは中高生の団体NLA(二覧表参照)の活動を行う他校生と出会う。誘われて自分もNLAに加入。それが転機となり、大学生のボランティアサークル交流会や地域活性化イベントなどにも積極的に参加するようになった。そのなかで、現状の地域活性化対策について、「何かおかしい」と感じたという。

「どのイベントに行っても同じ顔ぶれで、業界内で完結しているような印象を受けました。ぼくらのような高校生も気軽に参加できるような場があれば、新しい和歌山の魅力を創り出していけるのでは

ないかと考えました(小幡さん)

そこで昨年8月、小幡さんは若者が和歌山の魅力や問題点を考えるきっかけ作りの場として、WAKKAというイベントを開催した。地域の交流スペースを借り、若者の演奏やパフォーマンスのあと、参加者全員で和歌山の魅力を共有するワークショップを実施。高校生をはじめ幅広い年齢層の50人前後が参加した。

初回の企画・準備は、高校の先生のアドバイスを得ながら、小幡さん1人が行った。すると、その様子を見ていた高校生4人が協力を申し出て、12月の第2回WAKKAで主催側に加わった。少しずつ賛同の輪が



第2回WAKAイベントでは、自己表現の場作りに取り組みダンサーのパフォーマンスや和歌山の魅力を語るワークショップが行われた団体の詳細→<http://wakayamakasseika.jimdo.com/>

広がっている。

かつて小幡さんの携帯電話の電話番号登録数は50件弱だった。それが現在、NLAでも中心的な役割を担う小幡さんは、全国の約千人とSNSでつながっている。人とかかわる喜びを知ったことは、学校生活も変えた。WAKKAで行うワークショップの議題「和歌山の好きどころ」で、小幡さんがあげたのは「耐久高校」。「毎日楽しくてしようがない」と高校は皆勤を更新中だ。

## 東日本大震災を機に立ち上がり メルマガ発行や東北ツアーを実施

「3・11後、何度か大学生と一緒に東北の被災地を訪れた時に感じたのは、ボランティアに来る高校生の少なさでした。長い年月がかかる震災復興には、若い力が欠かせません。そして周囲には、被災地支援に興味のある高校生がたくさんいます。だからもっと多くの10代が震災復興にかかわれるよう、環境を整えたいと考えました」

そう話すのは、この春に神奈川県の高

校を卒業した塚田耀太さん。高校生をはじめとする10代の復興支援団体「Teen for 3・11(以下TF3)」の代表だ。昨年3月、高校生が主催する「高校生環境フォーラム」で、10代が復興支援しやすい環境と次の震災に備えて素早く行動を起こせる体制を整える必要について、塚田さんがプレゼンテーション。それに共感した仲間が校内外から集まり、TF3が発足した。

取材・文／藤崎雅子

校を卒業した塚田耀太さん。高校生をはじめとする10代の復興支援団体「Teen for 3・11(以下TF3)」の代表だ。昨年3月、高校生が主催する「高校生環境フォーラム」で、10代が復興支援しやすい環境と次の震災に備えて素早く行動を起こせる体制を整える必要について、塚田さんがプレゼンテーション。それに共感した仲間が校内外から集まり、TF3が発足した。

関東本部の運営メンバーは、首都圏の高校生を中心とした約40人。広報・冊子・イベント・旅行の4班に分かれて活動している。広報班は次の災害が起こった時に支援助し合えるネットワーク作りを目指し、Facebookやメルマガ、ブログなどで発信。冊子班は昨年、被災地の今を伝えるフリーペーパー「東北さいこう」を発行した。イベント班は東北の食材を使った料理教室などを開催している。旅行班はこれまで3回の東北バスツアーを企画。各42人の高校生が参加して気仙沼の10代との交流

■ 高校生団体の例

※表の見方: ①発足年 ②活動の中心地域 ③活動の概要

<b>NLA (ニュー・ライフ・アドベンチャー)</b>	>> <a href="http://www.nla.or.jp/">http://www.nla.or.jp/</a>
①1977年 ②全国各地 ③名古屋市の高校生が「大人の受け売りではなく、高校生自身でモラルを考えよう」と提案したことから広がった、自分らしさを出し合い認め合う中高生のネットワーク。中高生が主張や音楽、パフォーマンスを披露するイベント「ナキワラ!」の企画・運営などを行う。	
<b>United Children (UC)</b>	>> <a href="http://unitedchildren.jp/">http://unitedchildren.jp/</a>
①2002年 ②全国各地 ③全国50の地域にて(2012年時点)、それぞれの地域を舞台に、課題解決や地域活性化などを狙ったプロジェクトを、中高生が企画から実践まで行う。OB・OGによるセミナーやプロジェクト企画のためのサポートツールなど、各UCの活動を支援する体制もある。	
<b>日本高校生学会</b>	>> <a href="http://japanhighschoolsocie.wix.com/jpn-hs-society/">http://japanhighschoolsocie.wix.com/jpn-hs-society/</a>
①2010年 ②首都圏 ③高校生同士で刺激し合い、より広い視野で物事を考えることを目指し、学校の枠を超えて自分の意見や考え方を本気で語る場。1~2カ月に1回、ディスカッションや自分史作り、代々木公園掃除ボランティアなどのイベントを開催。	
<b>高校生ボランティア団体co-Act</b>	>> <a href="http://coact.jimdo.com/">http://coact.jimdo.com/</a>
①2011年 ②札幌市 ③東日本大震災をきっかけに発足。企業に協力を呼び掛けて制作したリストバンドを有料配布し、昨年その売り上げ約15万円を被災地に寄付。ほか、大学生の震災支援団体と意見交換したり、連携してボランティア活動などを行っている。	
<b>bud</b>	>> <a href="http://bud-ashitahe.jimdo.com/">http://bud-ashitahe.jimdo.com/</a>
①2012年 ②名古屋市・仙台市 ③東日本大震災の被災地支援のため、名古屋市の高校生が立ち上げた団体で、仙台の高校生も参加。東北の食材を使った「仙台×名古屋 高校生のmake・未来べんとう」を開発・販売、防災関連の情報発信を行っている。	
<b>高校生団体TSUNAGI</b>	>> (Facebookページあり)
①2012年 ②首都圏 ③若者の社会への興味関心を高め、共に日本を良くしていく活動ができる仲間を増やすために設立。未来から見た「あの時こんな場所があれば」の提供を目指し、主に高校生を対象として社会起業家や政治家などをゲストに招く講演会を主催。	
<b>HOT JAPAN Project</b>	>> <a href="http://www.hotjapan-project.com/">http://www.hotjapan-project.com/</a>
①2012年 ②全国 ③“HOTな日本”の国内外への発信と地域活性化を目的に設立。東京の運営本部を中心に、全国の高校生がメンバー。日本全体や自分たちの住む地域を研究・発信するほか、学校や地域の枠を超えた文化祭の進化系イベントなどを企画・実施。	



Teen for 3.11が発行する冊子『東北さいこう』。東北旅行の報告、ボランティア情報などを盛り込んだ28ページ。フリーペーパーのコンテストStudent Freepaper Forum2012では大学生に混じってトップ20に選出された団体の詳細(冊子のダウンロード可能)⇒<http://teenfor-311.jimdo.com/>

やワークショップを行った。月2回程度の全体ミーティングのほか、班ごとにスカイプやLINE、メールなどでやりとりし、バスツアーの企画・立案から冊子のデザイン制作まで、すべて高校生のメンバーが分担して行う。手分けして企業干社にアタックし、冊子の印刷費用の支援を取り付けたことも。こうした経験は人生観や将来像にも影響しているようだ。高2の時にTF3立ち上げ時から参加する副代表・古川拓さんは、「TF3との出会いがぼくの人生をひっくり返した」という。「バス会社との折衝などを通じて、社会の

この「高校生100人×国会議員」イベントを企画したのは、10代の政治関心の向上および政治参加の拡大を目指す、首都圏の高校生団体「僕らの一歩が日本を変える。」だ。こうしたイベントのほか、昨年末の衆議院選挙前には全国12カ所の主要都市をめぐる、千人を超える高校生を取材してインターネット上に発信する「全国行脚」も行った。

昨年この団体を立ち上げたのは、当時法政大学第二高校3年だった青木大和さん。高1で留学した米国で同世代の政治家意識の違いに刺激を受け、帰国後は竹島問題の論文を書いたり、政治塾に参加するなど独自に活動。それがマスコミに紹介されることもあった。しかし、青木さんはある日、友人からの「お前のすごさがわからない」という言葉で気づいたという。

しくみや働くとはどういうことか、具体的にみえてきた気がします。以前は漠然と「将来は起業したい」と考えていましたが、今はそれだけが人生じゃないと、幅広く考えるようになりました(古川さん)

**全国の高校生100人と国会議員との討論会を開催**

3月28日、国会議事堂隣の衆議院議員会館に、全国から高校生100人が集合。自民党の石破茂氏、社民党の福島みずほ氏ら国会議員30数人も参加し、現代社会の問題について熱い討論を繰り広げた。

今回のイベントでは、遠方の高校生も参加しやすいように、協賛企業を募って交通・宿泊費を支給する制度を導入。参加者の4割は首都圏以外から集まった。北海道から参加した遺愛女子高校3年の小川夏生さんは、地方自治をテーマに議論。「いろんな方と熱い議論ができて視野が広がりました。地元の小さな町の振興のため、帰ったら学校でも呼び掛けて何か活動をしていきたい」と語る。青木さんの思いの種は全国にまかれ、各地で大きく育ちそろう。

\* 社会とかがわかるが、難しさを感じることもや失敗して落ち込むこともある。しかし、「自分たちで始めたことだから自分たちで考える」(青木さん)。仲間となぜ失敗したかを話し合い、改善を進めていく。そんな活動について「楽しい」と彼らは話す。



「僕らの一歩」イベントの後半は、教育や福祉など6議題について班別に討論。民主党の蓮舫氏や日本維新の会の中田宏氏、みんなの党の松田公太氏などの議員が議論の輪に加わった団体の詳細⇒<http://hgst-pw.tumblr.com/>